

日本産漆を支援する

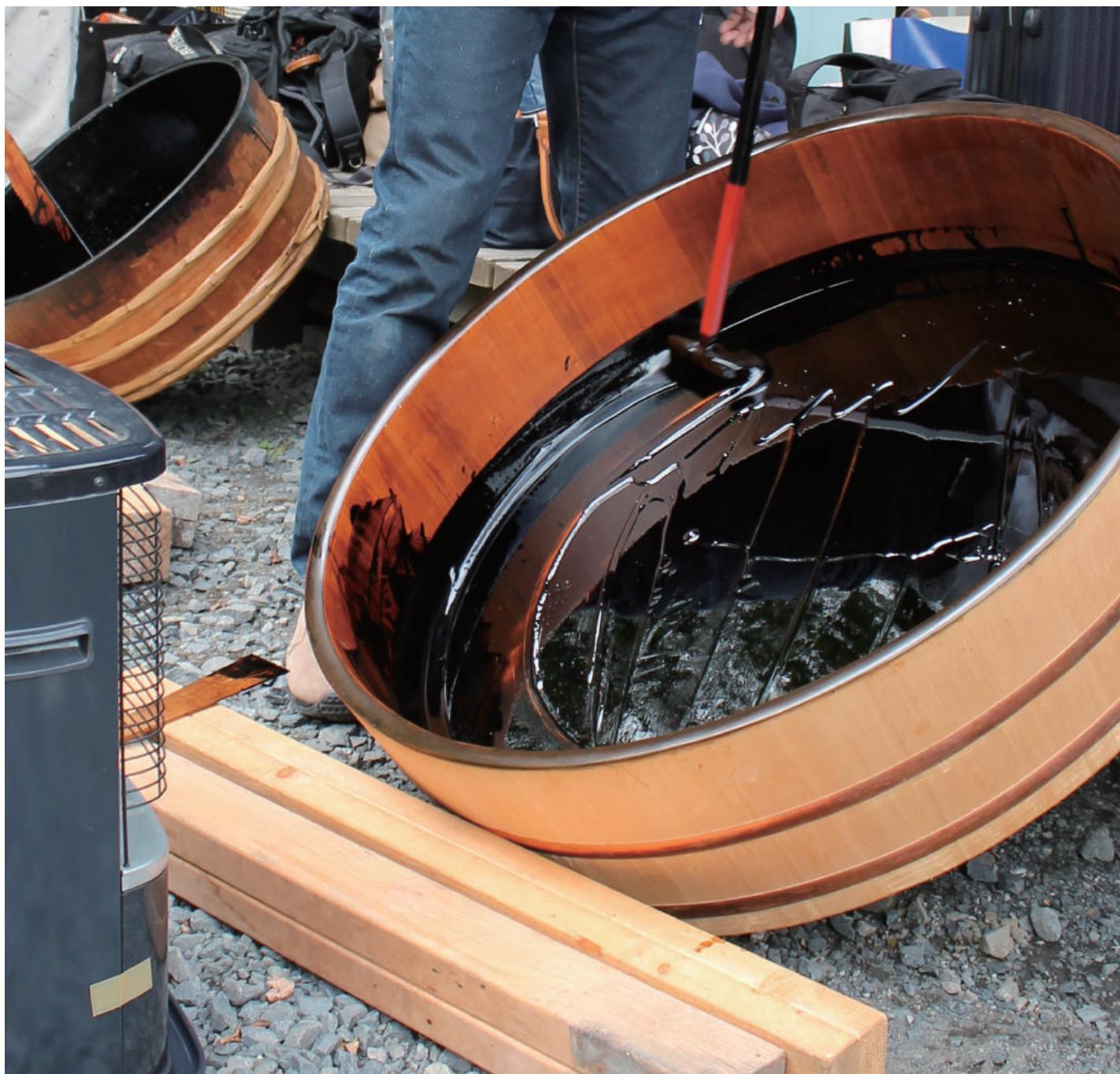
NPO法人

# 壹木呂の会

I C H I K I R O

- 2017年度クロメ会特集号 -

会 報  
第 16 号 / 2018年4月発行



## 「目次」

### 2017年度 壱木呂の会クロメ会

	正会員	坂本 豊	正会員	牧野 敦子
	ビジター参加		正会員	坂本 豊
14	「漆撒き体験・見本林見学に参加して」	漆撒き会講演について	「講演会をお聞きして」	「壱木呂の会に参加して」
12	漆撒き会講演について	「クロメ会講演について」	「クロメ会講演について」	「クロメ会を振り返つて」
10	正会員 漆刷毛製作者	正会員 内海 志保	正会員 清水 由季子	正会員 吉川 由季子
8	梅本 浩史	梅本 浩史	梅本 浩史	梅本 浩史
6				
4				
3				



一般的に生の生漆を中塗りや上塗り用などの目的に仕上げることで、ナヤシという作業からクロメという一連の作業を指します。

ナヤシという作業は簡単に申しますと漆の幾つかの成分を微細にすることが目的です。

その上で25%前後含まれている漆液の水分を、温度を余り上げずに3から5%程にする作業です。温度が上がりすぎると漆を硬化させるために重要な酵素の活性を失わせてしまいます。日なたでのクロメ作業の時、天気が悪く温度が上がらない場合は反射型電気ストーブや石油コンロを用いて温度を保つようにします。

クロメの仕上がりの見極めが難しいのですが、最終段階では急激に温度が上がらないように注意が必要です。

## 2017年度 壱木呂の会クロメ会

### クロメ会を振り返つて

正会員 坂本 豊

私がクロメ会に参加しはじめて、もう何回になるでしょうか。

最初は見学しながら何かお手伝いのつもりで参加しましたが、今ではすっかり秋の恒例イベントになりました。そのうちに仕事仲間（私は鎌倉彫を生業としています）を誘い「一度見学に来てみては」と声をかけたのが始まりとなり、今では何人かの仕事仲間も毎年クロメ会に参加しています。そんな中、私が所属している鎌倉彫協同組合の事務所がある鎌倉彫会館の改修工事を行うことが決りました。建物の一階スペースにカフェを併設し、一般の方々に鎌倉彫の器で飲食を楽しんでいただこうということになりました。そして、そのカフェで使用するカップを製作可能な工房を探していることを伺い、本間先生の荻房を協同組合に紹介したことがきっかけとなり、壱木呂の会との繋がりができました。

2016年春に組合は鎌倉彫関係者23人が参加して、奥久慈漆生産組合、壱木呂の会会員有志と大勢の方々の協力で、奥久慈に畑を借り漆の苗木を植栽しました。その後には鎌倉彫協同組合長始め、数人の組合関係者がクロメ会に参加し、春に植栽した漆畠の様子を見学しました。

「鎌倉彫協同組合漆畠」のプレートを畠に立て、写真撮影などを行いました。その後クロメ会の様々なイベントに参加しました。

「鎌倉彫協同組合漆畠」のプレートを畠に立て、写真撮影などを行いました。その後クロメ会の様々なイベントに参加しました。

最後になりましたが、その漆苗木の植栽時には奥久慈漆生産組合をはじめ、荻房スタッフ、壱木呂の会会員有志の方々に大変お世話になりました。文面にて失礼ながら改めましてお礼申し上げます。



## — 壱木呂の会に参加して —

ビジター参加 牧野 敦子

9月30日、10月1日「2017年度クロメ会」に初めて参加させていただきました。道中不安でしたが、過去最多人数という多くの参加者と、自然に囲まれた温かな雰囲気に心地よい時間を過ごすことができました。



竹籠作りの体験(日本工芸会正会員・佐川素峯氏)



ウルンの木を用いた草木染め



漆林見学と漆掻き体験



和紙作り体験(西ノ内和紙・菊池三千春氏)

ません。最終的に籠の形にあわせ竹をカットしますが、その端材は大事に再利用し、無駄にしないように努めました。漆掻き体験では道具の持ち方から丁寧に教わり、一連の動作を行いました。数人がしつかり掻いて体験してもタカッポの底すら溜まりません。漆掻きの工程を耳で聞くよりも、その作業の過酷さを痛感した瞬間でした。

夜の懇親会と翌日の講習では、現在の壱木呂の会の活動など様々な興味深いお話を拝聴しました。中でも漆掻き道具の生産方法の保存活動のお話が印象的でした。实物を参考に掻鎌を職人が見た目そつくりに作つても、わずかな角度により使い勝手が悪くなつてしまつ。若き漆刷毛職人の内海志保さんからも刷毛作りに欠かせない鉄櫛の生産者がいなくなり、現存する道具を大事に使つているというお話をありました。原料・職人・道具すべてが揃つてないといふと工芸は次の世代に伝えていくことができません。しかし近年伝統工芸を取り上げられると、ほぼ毎回「最後の」や「ただ一人」とつくことが増えてきたようになります。聞く度にジワリと不安が胸に広がり「何かできないか」と漠然と考えつても何も行動せず毎日を送っています。それに引き替え内海さんのエネルギーッシュな試行錯誤、そして本間理事長を始めとする壱木呂の会の方々の、近年減少する国産漆の危機に「自分たちが動こう」と率先して行動する頼もしさ。その強さと尊さを痛感すると共に、自分も今度こそと背中を押される気分になりました。

最後になりましたが事務局の皆様、そして初参加の私を温かく迎えて下さった参加者の皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

時同じくして工房内ではクロメ作業が行われていました。その慣れた手つきにひきつけられるように見学者が入れ代わり立ち代わり現れる中、今年は雨が多く漆に水分が多いことや漆の採取量が少なかつたことが囁かれ、皆様の漆に対する知識と関心の高さを窺い知ることができました。その後竹講習と和紙漉き体験、漆コーヒー試飲、漆掻き体験や漆林見学が行われました。竹講習はその難しさに参加者全員困惑し、作業は困難を極めました。たつた3時間半の体験でしたが、この日の為に何週間も準備をして下さった佐川素峯先生には感謝しかありません。

会員の方々にはただただ頭が下がる思いです。

時同じくして工房内ではクロメ作業が行わっていました。その慣れた手つきにひきつけられるように見学者が入れ代わり立ち代わり現れる中、今年は雨が多く漆に水分が多いことや漆の採取量が少なかつたことが囁かれ、皆様の漆に対する知識と関心の高さを窺い知ることができます。その後竹講習と和紙漉き体験、漆コーヒー試飲、漆掻き体験や漆林見学が行われました。竹講習はその難しさに参加者全員困惑し、作業は困難を極めました。たつた3時間半の体験でしたが、この日の為に何週間も準備をして下さった佐川素峯先生には感謝しかありません。

漆塗り体験・見本林見学に参加して

ビジター参加 梅本 浩史

今回初めて、奥久慈での漆掻き体験、漆の見本林見学をさせて頂きました、東京都に住む梅本と申します。私はこれまで、樹木に関連した様々な調査業務に従事し

雑誌や図鑑、会報誌などに原稿を書かせて頂く機会も多く、長いものでは、十年以上も連載が続いているものも御座います。予てより私も、日本の伝統的技法を用い生み出される漆器や漆工芸と言われる分野に、関心を置いておりました。その興味の対象は自ずと、それらの職域に材料を供給する形で支える漆生産者の方々に

も目が向き、漆を探取する「漆搔き」作業を知るに至りました。

今回参加させて頂いた2日間で、強く印象に残った事柄や大きな学びとなつた出来事、感銘を受けた言葉などを挙げる  
と、枚挙に遑がないほど、非常に有意義な  
ひとときを過ごさせて頂きました。

念願だつた漆の見本林を訪ね、漆搔き  
の実演が見られた事は、やはり大きな喜  
びでした。よりよい品質と採取に適した  
漆の品種を求めて試験栽培が行われてい  
ること。漆の成長を左右する林床の草本  
の種類にも気を配られている様子など、  
とても新鮮な驚きでした。

その合間に行われた竹細工や漆の草木  
染め、紙漉きなどの講習、そして富永さん  
による木工ろくろの作業の実演など、何  
れをとっても魅力あふれる内容ばかりで  
した。一方、私はどうしても周辺の植生に  
も興味が湧いてしまうため、少しの間だけ  
講習を抜けて、ひとり近辺の植物観察に  
も出掛かけました。

その合間に行われた竹細工や漆の草木染め、紙漉きなどの講習、そして富永さんによる木工ろくろの作業の実演など、何れをとっても魅力あふれる内容ばかりでした。一方、私はどうしても周辺の植生にも興味が湧いてしまうため、少しの間だけ講習を抜けて、ひとり近辺の植物観察にも出掛けました。

当日は、ツリフネソウやミヅソバ、ヤマハツカなどが咲き乱れ、キケマンやタマア



お花も確認出来ました。丁度、林縁部では、マタタビやスズメウリの実がぶら下がり、アブラチヤンやチヤノキ、コクサギの実などを集めて、クサギの葉っぱにのせ、工房まで持ち帰りました。周囲の野山を散策するだけでも、奥久慈の自然の豊かさに感動を覚えます。

2日目の講演会では、漆の見本林でも楽しい逸話をお聞かせ下さった漆刷毛職人・内海志保さんの「漆刷毛」が出来る

ジエクトのお話。そして、東慶寺の井上米輝子先生がお話し下さった、僧侶が托鉢の際に携行し、厳格な作法の伴う食事の器でもある「持鉢」にまつわるお話など、全てが初めて見聞きする事柄ばかり。誠に、感慨深いひとときでした。

丁度先日、京都の和蟬燭職人のかたと  
お会いし、色々とお話しをしておりました。

の大切な役目であります。  
とても微力では御座いますが、私自身  
も何かのお役に立つことが出来れば…。そ  
う感じた2日間でもありました。今年も  
また、ぜひ参加させて頂こうと思ひます。

## 講演会をお聞きして

正会員 徳山 やよい

きない短い毛を活用され国産の髪の毛でも作られて  
いるそうです。

2017年度クロメ会で刷毛作りの内海志保さんと北鎌倉・東慶寺の井上米輝子さんの講演会に参加しました。

最初に講演会共催の日本漆アカデミーから森林総研の田端先生ご挨拶があり、まず内海さんのお話を伺いました。

内海さんは職人さんは思えない小柄で華奢な方で驚きました。

大学卒業後3年間東京の田中刷毛店で田中信行氏の元で修行され、昨年12月に会津若松のご実家で刷毛作りを始められました。会津は修行された東京と気候が違つて刷毛作りにいろいろご苦労があるそうです。

現在漆芸用の刷毛を作つておられるのは泉清吉氏と田中信行氏の二軒しかありません。内海さんが開業されたことは漆芸界にとって大変うれしい事です。刷毛用の髪の毛は中国産が主だと思っていましたが最近はヘアドネーション（病気や不慮の事故で髪を失つた18歳以下の子供や女性の為に寄付された人毛でかつらを作り無償で提供する活動）で使用で

べきであります。しかしおられないとか、以前泉さんは米国産の材を一部使っておられると聞いたことがあります。やはり代替えのものを考えて行かなければならぬので刷毛の板も檜の丸太を割つて下さる方がもう一人しかおられないとか、以前泉さんは米国産の材を一部使っておられると聞いたことがあります。やはり代替えのものを考えて行かなければならぬのでしょうか。

でも会津に戻られて鋸の目立て屋さんを探す苦労は無くなられたようで良かったです。

刷毛の毛の良し悪しは原毛の下処理の方法の違いで決まつて来るそうです。自然に枯らされるか、薬品で油を抜くかで毛板にする時の漆の入りが全く違うとのことです。やはり時間をかけたものが良いものになるのでしょう。

内海さんは様々なアイディアを出し、工夫をされて、研究されて刷毛作りに向き合つておられます。これからも活躍頂きたいと思います。

漆器は扱い、手入れが面倒とわたし達は刷り込まれて日常に使うことを敬遠しがちで、所もありますが長所の方がずっと多い、そこをどんどん広めていけば良い、婦人雑誌の料理記事などに載せてもらうと良いとのお話をした。和食だけではなく洋食にも使つていいば良いと思います。

漆器は身近なもので良さをもつと知つてもらうための広報をどうしていくか、漆器は短所もありますが長所の方がずっと多い、そこをどんどん広めていけば良い、婦人雑誌の料理記事などに載せてもらうと良いとのお話をした。和食だけではなく洋食にも使つていいば良いと思います。



北鎌倉・東慶寺 井上米輝子氏「漆器のある暮らし」

日本で育てた漆の食器をもつと大事に使って頂きたい、毎日使うことによって本当に良い味わいになつていくそうです。井上さんのご主人の持鉢はお食事を終えたあとそれでお茶を飲み布巾で拭いておくだけで本当に良い味わいになつていています。何でも大切に長く使えば愛着がでて来てくれる大切に出来ると思いました。

お味噌汁のお椀だけでなく、ご飯のお茶碗も石偏のお碗ではなく木偏のお椀で頂きました。このお話を伺つて、これからはしまい込みがちな漆器を出して日々の食事に使っていこうと思いました。

続いて鎌倉東慶寺の井上米輝子さんの「漆器のある暮らし」のお話を伺いました。

井上さんは茶人として活躍しておられるので日常でいろいろな漆器をお使いだと思

ます。東慶寺は臨済宗のお寺で、禅宗の修行僧、雲水の方達は托鉢をする時持鉢と言う四つ組のお椀を常に携帯してどこでもそれで食事をされるそうです。井上さんが結婚祝いにもらわれた持鉢の実物をお持ち下さいましたが、使い勝手が良さそうで、塗りも大変美しいものでした。ご主人様は毎日持鉢でお食事をされていたそうでとても良い艶になつてゐるところです。四十年ほど毎日使つてこられてもびくともせず、さらに艶が良くなつていて、漆器は本当に堅牢なものだと思います。

この持鉢はお茶事の四つ椀に転用されて、形はいろいろあるようです。

日本人は食器を手に持つて、口を付けて食事をします。漆器の最大の利点は軽くて口触りが良いとのお話しがありましたがまったく同感です。

鎌倉彫の彫の深さと色は日常使いにするにはちょっとと言ふお話は納得でしたが、作られる方達の「鎌倉彫だから彫らなくては」「あの色こそ鎌倉彫」とおっしゃることも分かります。

漆器は扱い、手入れが面倒とわたし達は刷り込まれて日常に使うことを敬遠しがちで、安易な方へ流されていつた後悔と責任感があるとお話しでした。確かにその通りで気楽に日常使いできなくともどかしい思いがしていました。

漆器は身近なもので良さをもつと知つてもらうための広報をどうしていくか、漆器は短所もありますが長所の方がずっと多い、そこをどんどん広めていけば良い、婦人雑誌の料理記事などに載せてもらうと良いとのお話をした。和食だけではなく洋食にも使つていいば良いと思います。

老後を軽い食器で過ごすと云うコンセプトで日常の使い勝手の良い器を作られたそうですがどんなものかぜひ見せて頂きたいと思いました。

日本で育てた漆の食器をもつと大事に使って頂きたい、毎日使うことによって本当に良い味わいになつていくそうです。井上さんのご主人の持鉢はお食事を終えたあとそれでお茶を飲み布巾で拭いておくだけで本当に良い味わいになつていています。何でも大切に長く使えば愛着がでて来るように大切に出来ると思いました。

## 「クロメ会講演について」

漆刷毛製作者 内海 志保

私は学生時代、地域資源という考え方で身近な素材と漆を持ち、地元会津の漆器産業について調べ始めたのが漆刷毛との出会いでした。

人は長い漆との歴史のなかで身近な素材と漆を組み合わせて、生活に必要な道具だつたり、くらしを華やかにするものを作ってきたのだと思います。そしてたくさんの人々の試行錯誤を経て数々の手工技術が産み出され、今日では本当に素晴らしい作品を目にすることができます。漆を塗る道具も昔は様々な纖維が利用されてきたのだと思いますが、今こうして私たちの一部である「髪の毛」を道具として使用するに至っていることに、複雑に絡み合いながら脈々と続いてきた漆と人との関係を垣間見るようで漆刷毛製作という仕事に非常に面白みを感じています。

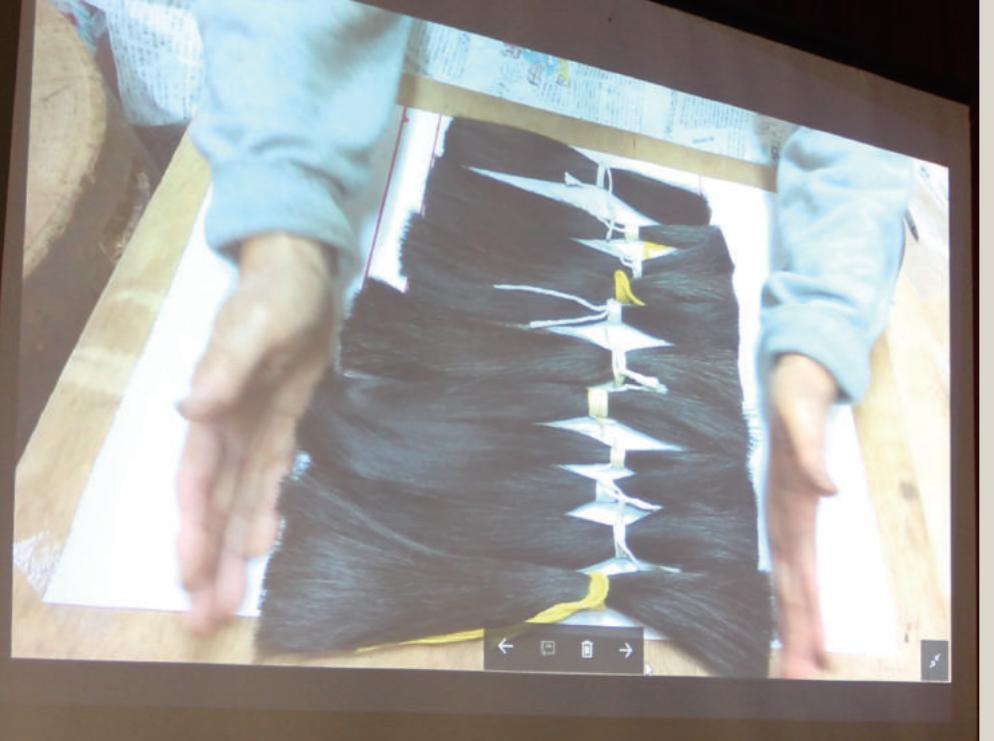
この仕事をはじめたときは、材料を決まった場所から買つては部屋に籠つて作る消極的なものに思えました。しかし、材料はどこから来るのだろうか、道具はこの先も手に入るだろうかとひとつひとつ考えはじめたら、今自分が立っている場所がどこまでも広がる細くてボロボロの網目の上のように思えて気が遠くなりました。しかし逆にいうと、ひとつひとつの中の材料や道具を掘り下げればもつといろいろな人やモノと出会えそうです。漆刷毛は多くの方にとって一生手にすることのない特殊なものかもしれません。

この仕事をはじめたときは、材料を決まった場所から買つては部屋に籠つて作る消極的なものに思えました。しかし、材料はどこから来るのだろうかとひとつひとつ考えはじめたら、今自分が立っている場所がどこまでも広がる細くてボロボロの網目の上のように思えて気が遠くなりました。しかし逆にいうと、ひとつひとつの中の材料や道具を掘り下げればもつといろいろな人やモノと出会えそうです。漆刷毛は多くの方にとって一生手にすることのない特殊なものかもしれません。

伝統工芸が私たちの生活の中での「生きた文化」であつてほしい。だから漆刷毛も「世の中の循環から外れた廃れ行く道具」「保護される対象」ではなく、少しでもより良い循環をもたらすものとして世の中に参加していきたいです。

講演では漆刷毛の製作工程や材料、道具についてお話ししましたが、これらはほんの一例に過ぎません。昔は製作者も多く製作技術も人によっていろいろあつたようですが、記録もなく消えていった技術がたくさんあるのがとても残念です。しかし漆刷毛は漆と同じように「生き物」を材料としていますから、まだまだ探究でかかる面白いものもあります。

クロメ会では様々な立場から漆に関わる方々にお会いできても興味深い体験をすることができました。これからも壱木呂の会の交流を通して勉強させていただきたいと思います。



講演中の内海志保氏



内海 志保氏 略歴

1990 会津若松生まれ  
2013 宇都宮大学農学部卒業  
2014 東京の漆刷毛師田中信行氏に師事  
2016 12月 会津の自宅にて作業を開始

製作の傍ら「漆刷毛ヘアドネーションプロジェクト」「うつわとスペース研究会」等活動を行う

# 漆サミット2017 in 鎌倉「国宝・重要文化財の修理に要する国産漆・木材の安定供給を探る」

正会員 清水 由美

12

2017年11月24日より3日間の日程で第9回漆サミットが神奈川県鎌倉市で開催されました。今回のテーマは「国宝・重要文化財の修理に要する国産漆・木材の安定供給を探る」です。

初日は鶴岡八幡宮直会殿にて、開会式と「これらの国宝・重要文化財の保存・修復を考える」と題する漆芸家 室瀬和美氏の基調講演、それから「鎌倉と漆器」鎌倉歴史文化交流館副館長高橋真作氏、株式会社博古堂代表取締役後藤圭子氏の講演そしてパネルディスカッションが行われました。

午後からは「国産漆増産に向けた取組と今後の課題」と題したパネルディスカッションが行われ、奥久慈漆生産組合長 神長正則氏が参加されました。懇親会は鎌倉彫会館カフェ俱利にて行われました。

2日目は鎌倉彫会館にて午前の講演では「住み継ぐ家・住み継げる家」と題して、建築家 日影良孝氏の国産木を使った家づくりのお話し、次に諸戸林業株式会社丹沢所長 笹原美香氏から「文化財を守る森づくり」として国産木材の現況と今後の取り組みについてのお話しがありました。木材も漆と同様に国産には使う側の気持ち良さがあり、最近は木造建築が再注目されている中、供給側の後継者不足が問題と感じました。午後からは講演と並行して、ワークショップ「鎌倉彫を体験し、国産漆を考える」が開催され、壱木呂の会の会員も多数参加しました。講演会では「国産漆の利用によって地域創生を考える」のテーマで彦十蒔代表



パネルディスカッション



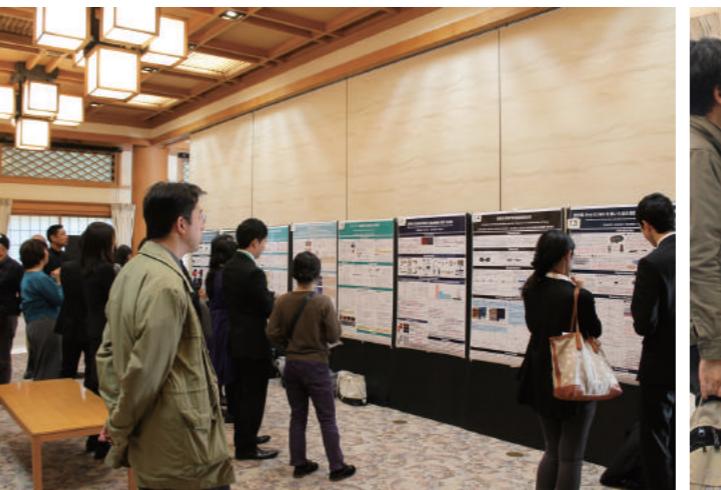
ワークショップ鎌倉彫体验



三好副理事長による作品解説



鎌倉の歴史的・文化的遺産を学び、体験、交流できる施設



ポスター発表の様子



10  
漆器と伝統工芸の技術展  
漆器と伝統工芸の技術展



神長奥久慈漆生産組合長

若宮隆志氏、鎌倉彫会館館長 後藤尚子氏、筑波大学芸術系准教授 宮原克人氏、岩手県商工労働観光部地域産業課長 高橋孝政氏からお話しがありました。

3日目は午前に北鎌倉・東慶寺にて重要文化財の見学。初日の基調講演の中でも取り上げられた「葡萄蒔絵螺鈿聖餅箱（国重文）」を三好かがり副理事長の解説と共に間近に見られる貴重な機会となりました。午後からは鎌倉歴史文化交流会館の見学。鎌倉歴史文化交流会館は2017年5月に開館した市営の文化施設です。鎌倉の歴史・文化の紹介、発掘資料が展示しております。建物は著名建築家設計の元個人宅で、あらたな鎌倉の観光スポットになりそうです。

## うるし 言の葉

賛助会員 吉川 由季子

### (2) カンナ（搔き鎌）



ヤスリをかけ丸くする。（肌に触れても痛くな  
いかで確認する）

力を入れずにつぶつと浚うだけにする。

金属の部分は平らな状態で入手するので、自  
分の使いやすい角度にベンチでゆっくり曲げる。

（曲げる角度は手の親指に合わせるのが良いとい  
われている）

①カマ・②カンナ・③ヘラが三点セット

繩文の昔より私達日本人は長い年月、漆を身近  
に使い続けてまいりました。

初めは接着剤、また塗料として単純に使われて  
いたものが、時代 時代の人達の作業工程の中で、  
道具が生まれ技法、素材などにも工夫がなされて  
きたのでしょう。

漆を専門にする人々にとつては何気ない言葉で  
も、器としての漆しか知らない方々にとつては聞き  
慣れない言葉ばかりだと思われます。

そこで今回より会報を読んで頂いている皆様に少  
しでも漆を知つていただくために『うるし 言の葉』  
として用語の簡単な解説を試みたいと考えました。  
皆様のお目に留まれば幸いです。

でも漆を専門にする人々にとつては何気ない言葉で  
も、器としての漆しか知らない方々にとつては聞き  
慣れない言葉ばかりだと思われます。

漆を専門にする人々にとつては何気ない言葉で  
も、器としての漆しか知らない方々にとつては聞き  
慣れない言葉ばかりだと思われます。

漆を専門にする人々にとつては何気ない言葉で  
も、器としての漆しか知らない方々にとつては聞き  
慣れない言葉ばかりだと思われます。

背側には鶏の蹄状の小刃（目さし）がついてい  
て、漆液を出やすくなるためにU字溝に切り込  
みを入れる場合もある。

形成層まで傷つけてしまふと木のその部分は  
死んでしまうので注意が必要。U字の幅の違い  
で「丁搔き」と「丁半搔き」の二種類ある。

カンナの切れ味が、作業効率や漆の品質にも  
影響するので手入れは重要。U字のところを研  
ぐ時は石板を使う

ヘラで搔き取った漆を入れる筒状のツボで、  
漆烟では手首に下げて持つ。

漆ツボは漆搔き職人が自分で作ることが多  
く、ホウノキの樹皮を剥ぎ筒状にして底にはス  
ギの板を貼る。

皮を丸める時は右からくる方を内側にする。  
(搔き手が左利きの場合逆の方が使いやすい)  
基本的な大きさは直径約12cm、高さ約15cmで  
(高さは使う人の好み)で約1600g入るが、  
ヘラから移す時に斜めにするので入る量は  
1000gほど。



### 【漆搔きの道具と使い方】

① カマ（腰鎌・皮剥ぎ鎌ともいう）

### (3) ヘラ（搔きべら）



搔き溝に滲み出た漆を浚う道具。

ヘラの先はカンナのU字型の部分の幅と同じ  
大きさにする。

ヘラの先は搔き口を傷つけないように、角に

漆ツボに残った漆を浚う時や、フタ紙やゴウ  
グリについた漆を浚う時に使用する。

現在はプラスチック製のヘラを使うことが多い。

漆ツボに残った漆を浚う時や、フタ紙やゴウ  
グリについた漆を浚う時に使用する。

現在はプラスチック製のヘラを使うことが多い。

ウルシの木の荒皮の凹凸を削り、幹の表面を

滑らかにする。

道具の柄は使いやすいように自分で作る。

柄の一番上に釘を打ち、手がすべて上部の刃

の方にいつて切らないように止める役目をする。



⑤ 漆樽

### (7) フタ紙

漆の表面が空気に触れて固化するのを防ぐた  
め、漆樽に蓋をする紙。（和紙に柿渋を塗つた  
もの）漆が発酵する約1か月の間はガスが発生  
してフタ紙が膨らんでくるので、空気が入らない  
ようによめに蓋をし直す必要がある。

現在はラップ・ビニールを使用することが多い。

採取してきた漆を入れて保存しておく樽。

1貫樽・2貫樽・3貫樽・5貫樽等数種ある。  
採取した時期（初辺、盛辺、遅辺等）によつ  
て分けて保存する。

少量なら、紙の桶・プラスチック容器も使用  
する。

漆を入れたら表面にフタ紙を敷いて保存する。  
漆樽がいっぱいになつたら鏡板で蓋をして、樽  
の上下を木の板で挟んでしっかりと縄で縛つて出荷  
する。



### (8) カケゴ（渡し木）



⑨ 木べら

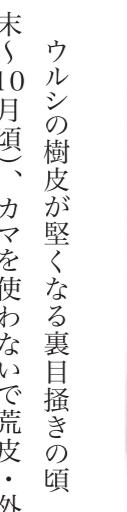
⑥ ゴウグリ（ゴングリ・棒グリ）



### (10) アブラ棒（アブラバケ）



### (11) エグリ



ウルシの樹皮が堅くなる裏目搔きの頃（9月  
末～10月頃）、カマを使わないで荒皮・外皮ま  
で削る道具。

その年の最後の頃なので、今までよりも木  
を傷つける心配をしなくてよいのでエグリを使  
用してもよい。

漆を漆樽に移す時に漆樽に掛けてゴウグリを  
用いる道具。

現在は木べら・プラスチックべらを使用して  
いる。

漆を漆樽に移す時に漆樽に掛けてゴウグリを  
用いる道具。

現在は木べら・プラスチックべらを使用して  
いる。

会報  
第16号／2018年4月発行  
- 2017年度クロメ会特集号 -

NPO法人 壱木呂の会事務局  
〒167-0052 東京都杉並区南荻窪2-27-3  
Tel:03-3334-0628 Fax:03-5930-4147  
<https://1kiro.jp/> [nihonsan@1kiro.jp](mailto:nihonsan@1kiro.jp)  
 <https://www.facebook.com/1kiro.jp/>

クロメ会にて振舞われた漆コーヒー。写真右上から、漆の実の殻を取り去ったもの、それを焙煎したもの、漆コーヒー、枯れた漆の実の房。